

出エジプト記 2章 1-10 節
ヘブライ人への手紙 3章 1-6 節
『救いの約束』

南三鷹教会牧師の吉岡喜人です。わたしは狛江市東野川に住んでいますので、仙川教会は自転車で行くことができる距離です。通勤途上でもあり、買い物などで仙川に来ることも多く、何度も仙川教会の前を通っているにも関わらず、門を通るのは今日が初めてでした。召された大串肇牧師とは、幼稚園のことなどでしばしば連絡を取り合っていましたので、天に召されたと聞いて驚き、深い悲しみを覚えた一人です。今日、皆様と共に神を賛美、礼拝できることに感謝するとともに、聖霊の主が仙川教会を守り導いてくださいますようにと祈っています。

さて、教会暦は、ペンテコステからしばらく続いた聖霊降臨節が終わり、主イエスをお迎えする準備の時期になっています。週報にも書かれているように、今日は降誕前第6主日です。もういくつ寝るとクリスマス・・・ではありませんが、6週間後にはクリスマスを迎えます。いろいろな準備を始められていることでしょう。わたしは、毎年準備が遅く、気が付いた時にはクリスマス用の礼拝プログラム用紙が品切れだったりすることがあるので、今年は余裕をもって注文しました。幼稚園では、先週からクリスマスの準備を始め、まずはクリスマス礼拝で行う降誕劇の役決めをしています。このような準備も大切ですが、最も大切なことは心の準備、魂の準備です。待降節に入る前のこの時期、日本基督教団の主日聖書日課は創世記からはじめて旧約聖書に記された神の救いのご計画を覚える時とされています。今日は、イスラエルの民をエジプトから導いたモーセを通して、神の救いのご計画に心を向け、救い主イエス・キリストのご降誕を待つ時としましょう。

約2000年前のイスラエルとユダヤは、次々と諸外国の支配を受け続け、精神的にも経済的にも苦しんでいました。彼らにとって心の支えとなっていたのは、2人の重要人物、モーセとダビデでした。

モーセには、いくつかの顔がありますが、まずは、政治的な力をもった指導者の顔です。モーセは今日読まれた聖書に書かれているように、生まれたイスラエル人の男子はすべて殺せというエジプト王ファラオの命令の中で生まれたモーセでしたが、姉のミリアムの機転によってエジプトの王女の養子となり、エジプトの王子としてエジプトの王宮の中で育つと言う数奇な運命を辿りました。しかし、そのような人生を辿ったからこそ、後にイスラエル人の解放を巡ってファラオと対等に交渉できたのです。神のご計画とは、その時には気が付かなくても、後になってわかるものなのです。モーセほどではないにしても、みなさんにも、あれは神のご計画だったなと思い当たることがあるのではないのでしょうか。わたしも人生を振り返ってみると、あれがそうだったのだと思うことはいくつもあります。人生の岐路において自分で選んだ道だと思っていたことが、実は神が計画された道だったと今になって気が付く次第です。

王宮の中で育ったエジプトの王子として育ったモーセですが、あるとき自分の出自がイスラエルであることを知りました。ある日、イスラエル人を虐待していたエジプト人兵士に腹を立てたモーセはその兵士を殺してしまい、エジプトから逃げ出しました。ある日、神はモーセを呼び出してイスラエルの人々をエジプトから連れ出せとお命じになりました。しかしモーセは、自分は口下手であり、民を指導するような力はないと言って神から逃れようとしたのですが、神はモーセの兄であるアロンを協力者としてつけてくださったのです。そして、ファラオとの対決を経て、イスラエルの人々をエジプトから導き出したのです。

モーセのもう一つの顔は、神と民の間に立つ仲保者、祭司としての顔、また預言者の顔です。エジプトを出たものの、ファラオの軍隊に追われ、食料が尽き、水もなくなるなど、何度も危機に立たされました。その都度、モーセは民を代表して神に助けを求めました。神は必ずモーセの願いを聞いてくださいました。そして、神はモーセを通してイスラエルの人々との間に契約を結び、律法を授けてくださったのです。

40年の荒れ野の旅を終え、目的地カナンを目の前にしましたが、モーセはカナンに入ることを神から赦されませんでした。イスラエルの人々は、偉大な指導者であり、祭司であり、預言者であったモーセを、建国の父として何世代にも渡って尊敬し続け、小さな子どもでもモーセの名前を知っているほどでした。

もう一人の重要人物、ダビデの人物像を見てみましょう。現在のイスラエルの国旗には中央に三角形を上下に重ねた六角形の星が描かれています。この星はダビデの星と呼ばれており、国旗に用いられるほど、ダビデは今日のイスラエルの人々にとって建国の立役者として尊敬されています。聖書の時代のユダヤでも、人々はダビデを偉大な王として尊敬していました。

ダビデは2代目のイスラエルの王として選ばれたものの、初代のサウル王に嫌われ、命を奪われそうになりました。なんとか危機を潜り抜けた後は、持ち前の力を発揮して、イスラエルの軍事力を高め、近隣諸国からイスラエルを守りました。さらに南北に分かれていたイスラエルの諸部族を統一しました。軍事力と政治力を持った王でした。ダビデの後、イスラエルは再び南北に分裂して力を弱め、北のイスラエル王国はアッシリアに、南のユダ王国はバビロニアに滅ぼされました。その後もペルシア、エジプト、ギリシアなどの支配を受け続けていました。苦しみの中、人々は、救い主の出現を待ち望みました。多くの人々が待ち望んでいた救い主のイメージ、それはダビデ王でし

た。主イエスの弟子の中にも、熱心党のシモンなど主イエスにダビデ王のようなイメージを期待した人がいました。それゆえ、主イエスがエルサレムに来た時、人々は主イエスにダビデ王のような期待を抱いて「ダビデの子にホサナ」と歓喜の叫び声を挙げて迎えたのです。しかし、主イエスがダビデ王とは真逆の方であると知った人々の声は、「十字架につけろ」という罵りの叫び声に変わってしまったのです。

モーセとダビデというイスラエルの人々にとって重要な2人の人物像を見てきましたが、モーセは宗教的、あるいは精神的なイスラエルの建国の父であり、ダビデは軍人、政治家としての建国の父でした。救い主を待つイスラエルの人々は、より現実的な救い主としてダビデ王のように強い救い主を期待していたのです。

現実的な救い主を求めることは、いつの時代にもありました。フランス革命を率いたジャンヌダルク、明治維新を起こして古い日本を新しくした維新の志士たち、ロシアの農奴を解放したロシア革命の志士たち、アメリカの奴隷を解放したリンカーン、皆、軍事力や政治力に優れた人たちでした。このような現実的な指導者も、社会の現実を変えるには必要なことはあるでしょう。しかし、人間の行うことには限界があります。間違いもあります。その指導者がいなくなると、そこでおしまいになることも、別の方向に向かうこともあります。革命によって搾取されていた貧民を解放したはずの人々が、いつのまにか搾取する立場になっていたりするのです。イスラエルでもモーセの後継者である祭司たちが、民を苦しめる人々になっていました。

では救いを誰に求めればよいのか。ローマ帝国とその傀儡政権であるヘロデー族に支配され、墮落したユダヤ教の祭司たちが指導者となっているユダヤの人々は、救いを誰に求めればよ

いのか分からないでいました。そこに出現したのが、洗礼者ヨハネであり、イエス・キリストでした。人々はヨハネの言葉を聞いて悔い改め、洗礼を受け、救いを待ちました。彼らは主イエス・キリストの言葉に出会い、驚きました。この人が救い主ではないだろうかと思う人もいました。しかし、主イエスが罪人として十字架で死んだとき、人々は失望しました。この人は救い主ではなかった、救い主はこのような死に方ほししないと。しかし、主イエスが復活して天に昇り、聖霊が降った時、少数でしたが、主イエスこそが真の救い主であることがわかった人たちがいました。その人々は、主イエスこそ真の救い主であることを人々に語り、信じた人々は、更に他の人々に主イエスこそ真の救い主であることを伝えました。こうして人々の間に主イエスを救い主、キリストとして信じる人々が増えて行ったのです。

しかし、何世代にもわたってユダヤ教の信仰の中で生活してきた人々は、たとえ墮落したユダヤ教であっても、ユダヤ教から離れられずにいました。なんとかそのような人々にも主イエスこそ真の救い主であることを伝えたい。その篤い思いで書かれた手紙の一つが、ヘブライ人への手紙です。主イエスのことを知らず、いまだに救い主の出現を心待ちにしている人々に、救い主は来られましたよ、ナザレのイエスこそ救い主なのです、と伝えるために書かれた手紙です。

主イエスを知らないユダヤ人はいても、モーセを知らないユダヤ人はいません。ユダヤ教の過越祭には家族が集まり、出エジプトの食事を再現した食事、すなわち小麦粉を水で溶いて焼き、数日してお煎餅のように固くなったパンを割って食べながら、家長が出エジプトの話をしします。毎年繰り返して同じことを行いますから、ユダヤ人で出エジプトの物語を知らない人はいません。そこで、この手紙では、イスラエル建国の父であり、ユダヤ人ならだれでもが知っているモーセに登場してもらい、

モーセとの関連で主イエスがどのようなお方であるのかを紹介しています。まず主イエスを大祭司と呼んでいます。実際には主イエスは大祭司ではありませんが、ユダヤ人にとってわかりやすいように、神に執り成しをしてくださる方ということで、主イエスを大祭司になぞらえているのです。ユダヤ人であれば、モーセが最初の祭司であること、大祭司であることを知っています。そこで、大祭司であったモーセは神の家全体すなわちイスラエルの全ての民に対して忠実だったが、主イエスは御自身を立てた方すなわち主イエスを救い主・キリストとして立てられた神に対して忠実であり、それ故、モーセに勝って忠実であったと主イエスを紹介しています。神に対して忠実であったとは、十字架の死に至るまで神に従順であったということです。さらに主イエスはイスラエルのための救い主を超えて、全世界の人々のための救い主であり、モーセに勝る方であったこと。モーセは神から律法を与えられ、犠牲の動物の血によって神との間に契約を結んだが、主イエスはご自身の血によって神との間に新しい契約を結んだと主イエスを紹介しているのです。

イスラエルの人々はモーセとダビデを偉大な人として尊敬していました。確かにその通りです。しかし偉大な人であっても救い主ではありません。二人とも人間である以上、真の救い主ではありえないのです。主イエスは、民族を超え、国を超えた世界の人々の救い主、時を超えた永遠の救い主です。なぜなら主イエスは人の形をおとりになった神の子だからです。わたしたちに真の救い、永遠の救いを与えてくださる方がこの世においでくださったことを記念する日、クリスマスが来ます。クリスマスに向けていろいろな準備をしますが、一番大切なことは心の準備です。心の準備をしっかりと、喜びと感謝の中で救い主をお迎えしましょう。